

二月八日（水）

今日は久しぶりにスケッチブックとイーゼルを抱えて、市役所近くのIBALAB®広場、中央公園で屋外スケッチ。水も冷たいし、荷物にもなるし、水彩絵具じゃなくて色鉛筆でささっと仕上げた。

防寒着はすっかり来ているものの、風が少し強い。身体がすっかり冷える前に、商店街の一本裏にあるレトロ調の喫茶店、ワンシーンへ駆け込んだ。ランチタイムだったけど、水曜日は少し空いているらしい。それほど待たずに中へ通してもらった。

日替わりのハンバーグランチを平らげ、食後のコーヒーを出してもらって、さつきスケッチブックに描いた絵を改めて見直す。一人で矯めつ眇めつ眺めていると、「こうした方がいいんじゃないですか？」と若い男性が、絵の一部を手で隠した。

最後に描き足した手前のボールが、全体のバランスを崩していたらしい。テーブルを挟んで目の前に立っていた男性は、隣の席に荷物を置いて、私の横に座った。「それか」と、スケッチブックの隣に置いた色鉛筆を眺め、私の目を見る。私が頷くと彼は色鉛筆を一本摘んで、手前のボールに色を塗り重ねた。色味が変わることによつて、さつきとはまた違う絵になった。

「勝手にいじつて、ごめんなさい」

「いえいえ。この方が素敵な絵になりましたから」

若い男性はもう一度「すみません」と言い、色鉛筆を戻して自分の席についた。仕立ての良さそうなスーツと、ほんのり鼻をくすぐる木のいい香り。ビジネスマンっぽい出で立ちをしているけど、ただものではない雰囲気微妙に漏れている。彼はメニューを見て、サツとブレンドコーヒーを注文した。スマートフォンを見ながら、お店の時計を見上げている。

「おお、悪い悪い。待たせたな」

お店のドアを開け、作業着の男性が彼の前に座った。作業着の男性は店員を読んでメニューを見ると、「メシ食ってもいい？」と彼に尋ね、返事を待つ前に日替わりランチとセットのブレンドコーヒーを頼んでいた。食事より先に、コー

ヒーが運ばれてくる。

作業着の男性は、運ばれてきたコーヒーを一口飲んだ。

「水曜日は休みじゃなかったっけ？」

「現場は休みでも、色々あんのさ。そっちは昼休み、だっけ？」

「そう。貴重なね。久しぶりに兄弟でメシ食おうって言うから抜けてきたのに、直前で遅れるか？ 普通」

「だから、色々あるんだって」

「晃の見積もりの甘さは変わらないな」

「兄貴が細かすぎるんだよ」

晃と呼ばれた作業着の男性は、運ばれてきたランチに手をつけた。スーツの男性は、それを見ながらコーヒーをゆっくり飲む。

「瑞希と原田くん、お前の仕事だった？」

作業着の男性は、食事を口に運びながら彼の方を見る。

「聡太みたいな変な虫より、アイツの方がマシだろう？」

「聡太って、お前のサッカー友達の」

作業着の男性が頷くと、彼も納得した表情になる。

「変なことしたら俺がぶっ飛ばすけど」

「そういうキャラじゃないな。免疫はなさそうだけど……」

作業着の男性と彼は、ニヤリと笑う。ジッとそちらを見てみると、スーツの男性がこちらに視線をくれる。何かを言いたげに片目を瞑る仕草は、とてもこなれているようだった。